

これは、不登校の息子さんを抱え、私たち『くじらぐも』と共に、学校や自分自身との葛藤・戦い・見守り他様々な思いの日々を過ごして来た 一人の母親から 皆さまへの 手紙です。

息子は、中学1年の頃「なんとなく心配、不登校になりそう」という気配から、徐々に欠席する日が増え、中2の春の連休が3年生の3月卒業まで続いてしまいました。(今振り返れば、私学に通っていた小学1年の時から、度々下車すべき駅を通り過ぎたりしていましたが・・・)

中学が終わりに近づきましたが、未だ今の様に「修悠館とか、向陽館、清南」等の様な「行き辛い生徒を対象に取り組んだ高校」は有りませんでしたし、「その後どうするか」悩む親に中学校からの提案は、「私学で、高校の認可の無いサポート校」ばかりでした。これは、平成30年の現在も未だまだその傾向はあります。そして、殆どの親は学校からこう言われると「学校に行っていない我が子が行くのは、こういう所しか無いのか」と思ってしまうのです。そんな私たちに、息子が3歳の時に出会って以来、一日も絶える事無く見守り続けて下さっていた方(現在のくじらぐも理事長)の、「ここで今一度息子の事を振り返り、何に困っているか、能力とは別な事でどんな面が不足しているか」を良く考える事と『『何処に行ったかと言う事より、どう過ごしたか』という事の方が大切なのでは?』という言葉から、大きな節目にぶつかり改めて息子と向き合わなくてはならない私に「考える基準を何処に置くべきか」という事に気付くと共に「しっかりしなくては! 勇気を出さなくては!」という今迄に無い力が湧いて来たのを今でも思い出します。

そして、高校に行かせる目的 を 一緒に整理して頂きました。

不登校になって、息子の心中には どの様な事が起きているのだろうか?

- ・信じてくれる友達がない
- ・分かってくれる先生が居ない
- ・信じられる大人が居ない
- ・自分は、学校や家族にとって厄介者だ
- ・どうせ自分は何をしても駄目だ。みんなもそう思っているんだ

全ては、自己否定と人間不信 です。

この辺りを充分に考え手当てをしてやる事を念頭に進路を考えなくては、今迄と同じ状態が続き更に悪化してしまうかも知れない。

今こそ「この子に何が必要か原点に戻って」考えなくてはならない時機だ という思いにやっと辿り着きました。

「ゆっくりと、時間の流れる中で、心のケアもして頂ける学校」という事で『養護学校』も選択肢の大切な一つに致しました。(不思議なもので、親がこの様な気持ちになり息子に接していると、それまで『絶対にもう学校なんかに行かない』と言っていた息子が「喧嘩はいい。いじめの無い優しい学校なら行ってもいい」と言い始めました。

養護学校に傾きつつある私達に、中学からは、「何故、サポート校(私学)に行かせないのか」という意見。

「自己と人間関係を回復させる為に行かせるのであって、単に高卒の資格取得の選択ではない。単位など追いかけるプレッシャーに弱く、伸びるものも止まってしまうタイプの子どもであること」等の話を何度も、しましたが、最後まで理解は得られず、

「普通級から養護なんて聞いた事も無い」(決してそんな事はないのですが)とまで言われました。

正直、このコースを選んで全く不安が無い訳では有りませんでした。学校からのこの様な言葉も、今振り返りますと「親としての大きな決断の確認に成った」事は確かだったと、思う事が出来ます。

父親や兄妹家族の理解など、受験するまでに幾つかの壁が有りましたが、本人や母親の気持ちを尊重して「父親や兄との話し合いや学校見学」など、くじらぐもの細やかなサポートを受け

家族全員で入学を祝える状況が整いました。

入学以来、本当の病気（中学までは休みたいための理由づけ）以外は、一日も休まず、又、中学では「お前が居ると負ける」と言われていたバスケの県大会出場（家族で応援に行きました）や、生徒会役員等多くの活躍の場を与えられ見違える様に成長しました。

不登校が続き、気持ちが乱れ息子に当たってしまう私に対して、母親の気持ちを理解し受け止めて支援し続けて下さった先生から

「学校に行けない子が、家に居づらくなったら何処に行けば良いのか」と、そして「もう、分かってやりなさい。許してやりなさい。やっと『学校に行けない。行かない』と言えたのだから」と、言われました。一方、母親の私にはそう言いつつも、息子に向かっては

「この世の中、何もしないで生きて行こうなんて、そうは甘くないよ。何でも良いから、一つでもいいから『これは俺様がやっているんだ!』と言える仕事を担当しなさい。」という様な厳しい事も言って下さいました。（始めた毎晩の米とぎとスイッチを入れる仕事は「有難う、おいしいよ、助かるよ」等家族の会話に繋がりました）

又、息子の場合、言葉に拘りを持つ傾向が有りましたので特にそう感じたのかも知れませんが、先生や周囲の人の一言で、大きく反応が異なり、先生との間に様々な行き違いが生じました。

先生からの言葉の中では、

「〇〇に行けて、どうして学校に来ないの？」（〇〇はカウンセリングルーム・居場所・個別や集団指導）等の言葉から「やはり分かって頂けない」と思いました。

子どもに対して「約束だよ」という言葉もよく出ていました。「行こうと思っても実行しようとしても、いざとなると体が動かない。制服が着られない。靴が履けなくなる」こんな状態の子どもにとって「約束だよ」という言葉は更に負担を負わせ、果たせなかった時（殆ど果たせないわけですが）罪悪感の様なものが膨らむばかりの様でした。この様な事も理解して頂く事は大変難しい事でした。

もし、この時「楽しみにしているよ。」「君の事忘れないでいるよ」等と言って頂けたら、本人の気持ちも違ったと思いますし、親としてのフォローもしてやり易かったのと思います。

卒業旅行に参加しようかどうか迷っている息子が、「グループの誰も知らない。一緒に回れるかな」と担任の先生にボソリと言った時「先に一人でホテルに帰って待っていれば？」という担任の一言は、息子の旅行への気持ちをバサリと断ち切ってしまいました。親としては「迷っているという事は可能性が有るという事」と思い、最後の最後まで努力する積りでしたが、フォローも出来なくなり大変残念でした。

この時「じゃあ、先生と回ろう!」とか「先生がいるじゃない」と言って頂けたら、と思うのは甘えなのでしょうか。

この様な息子を見て、家の中以上に学校に居場所の無い事を強く感じました。

ただ、一口に居場所と言っても、小学生のそれと、中学生では、又、一人一人その子によって、どの様な居場所が相応しいか、とても難しい事と思います。

人との関わりを不得手とする子どもは 自分では居場所を見つける事は出来ません。最近ハートフルや民間支援団体の居場所が増えて来ましたが、学校内にも開かれたスペースが有ると嬉しいです。

母親同伴で登校したが、結局は別室や図書館の片隅で親子二人だけで過ごし帰宅した。これでは登校した意味が感じられない。と、今現在言っている親子も居ます・

こんな事を言いますと、全てを学校の所為に行っている様に感じられるかと思います。

でも、残念ながら渦中で混乱する親子、特に母親の殆ど、初めはこの様な気持ちなのです。そして、大方の母親は子どもの訴えの中でしか物事が見えず、子どもと一緒に落ち込んで行くのです。

私も、この様な事と、時期を過ごしました。そして、本当に出口のない暗いトンネルへ迷い込んだような不安と、学校や周囲の人々への不信ばかりが募っていきはじめました。

不登校の生徒が出た時、「本人自身」の問題では有りますが、クラス全体の課題、問題として考えて頂ければ、とても有り難いです。これは、他の生徒さんが、この様な級友の状況を理解し、接し方を一緒に考える機会になります。みんなで考えて行くという事は、当事者にとって良い居場所作りにもなっていきます。何よりも、不登校でない生徒さんも自分以外の苦しんでいる者のことも考えるとてもよい学びになると思いますし、同時に不登校生徒が出た時、何らかの影響を受け、困っているクラスメートも居るからなのです。

それに何よりも「**不登校は何時、どんな子にも、どんな家庭にも起こり得る事**」だからです。

真っ只中にいらっしゃる方々には、とても厳しい言葉かと思いますが、今、あえて言わせて頂きます。

不登校の原因は、皆様もお感じの様に、一つだけではありません。本人本来の資質以外に、様々な出来事、トラブルが続きます。でも、**トラブルは決して一人では起きません。**

我が子からの訴えから、**一歩離れ、いろいろな角度から観て考える様** 努めてみてください。

何故なら、この様な状況に居る多くの子ども達は、被害者意識も強くなっています。(時には子ども以上に親が陥ります)

又、息子もそうでしたが、子どもというのは「言い訳にも、逃げるためにも」被害を大きく伝えようとする事を、ほんの少しですが、不登校支援のお手伝いをする中で実感しました。これは、発達障害とかには関係なく多くの、全ての子どもの言えるという事をも、改めて感じました。

【子どもを尊重し】【受け入れること】 が【子どもに流されること】にならない様に。

【あなたの言う事は分かった。と イエス (話は分かった、でも、OK ではない)】【我儘と苦しみの見極め】

【待つこと と 許すこと】

これらの違い・見極め・判断は 本当に難しいと思います。

この難しい判断は、第三者の声も素直に聴いたりしながら **冷静さと 距離を置いて観る目** が必要な事、そして、何よりも、親が確たる信念を持つ事の必要を強く感じました。

傾聴 と 受容】の難しさは、今なお大きな課題となっています。

私も、日々の生活の中で、理解出来ない息子の言動にぶつかると、いつも、「これは、ずるかしら？わがままも過ぎる。ここでガツンと言いたいが、反抗されたら、どうしよう。」「注意してもっと状況が悪くなら困る！」と、おろおろし、不安と葛藤の連続でした。

こんな時、役割を分担して「叱り役・なだめ受け止め役」を 先に書いた先生にして頂けた事は、「気になる事から逃げ出さずに過ごせた」と同時に、母親の中に生まれるあらゆる感情を我慢することなく吐き

出せ、自分の感情と向き合う、という一人では出来にくい事、事態と自分感情や捉え方の整理をする事のお手伝いをして頂いた事にもなっていました。

これは、今日ある**一番の「力」**になった様に感じます。

不登校の解決や改善は、決して保護者だけでは出来ません。

是非、皆様にも「良い相談者」を身近に持っておかれる事をおすすめします。

助けを借りて、学校や地域と良い関係を築いてください。

以下は、私達親子を見守り、支援と指導をし続けてくださった先生から、常に言われて来た言葉です。

- ・言葉使い は 心遣い
 - ・学校など、何処に行ったということより、どう過ごしたか が大切
 - ・先ず、自分が関係する周囲の人を信じようとしなくては、相互理解も 道も拓けていかない
 - ・相手の立場になって考えてみよう
 - ・子どもを可愛がって欲しいと思うなら「可愛がってもらえる母親になりなさい」
 - ・何事も失敗という事は無い。失敗として終わらせるか、学びの一步にするかは、捉え方で決まる。
- 私自身そうであったか、守れていたか、自信は有りませんが、常に心には留めていました。
そして、最後に皆様に一番お伝えしたい言葉です。

**『原因は、誰か他の人が作ったかもしれない。 でも、それを
どう観て、どう捉え、どの様に向き合うかは 自分自身の問題である』**

今でも思い出すと辛くなる事はあります。

これらの言葉はどれも、騒ぎの真っ只中に居る私には 大変難しいものでしたが、この厳しさから逃げない事が、又、そうする為に根気強く見守り続けて頂けたことが今の息子を囲む「我が家がある」と 思っています。 そして、母としていくらかは成長できたのではと、思っています。 決して短い戦いではありません。
難しい事ですが、どうぞ皆さま、笑顔とご自愛を お忘れになりませんよう。 力まずに頑張ってくださいよう心からお祈り申し上げます。

まだまだ見守って行かなくてはなりません

息子は、お陰様でランドマークにあるアパレル関係のお店 G に勤め始めて、2020年現在、勤続15年近くになります。

決して職場での問題も無いわけではありませんが、何とか自分で解決する様に頑張っています。

いざ、本当に困ったことが起きれば「先に書きました先生が、必ず話し合いなどに力を貸してくれる」という安心感に支えられ、休日には友人と出掛け、ハードな勤務の中にも自分なりの楽しみを見つけれられる様になりました。

「不登校児の苦しみを知る自分に出来る事を」とボランティアにも励んでいます。 2020年改定